

飯岡の渡し場跡と石造物群

鈴木重治

南山城の地域を上空から見ると、ゆるやかに蛇行しながら流れる木津川が、一筋の白い帯となって水の道を示しながら光っている。流れに沿って奈良と京都を結ぶ国道24号線が共に寄り添うように並んでいる。

時代や地域によって、奈良街道とか大和街道と呼ばれた古道が、川の左岸と右岸に見える。奈良時代以降の山陰道と北陸道の老いた姿である。

古来、南山城の道のメインは木津川であった。大和の玄関口として栄えた木津は、泉川の名前さえ木津川と変える程の力を持っていた。この木津川の舟運が盛んであった証しは、多くの文書や記録の他に、川筋のあちこちに残る遺跡や遺物がよく物語つ

ている。今では木津川にもいくつかの橋が架けられているが、以前は多くの地点で渡し舟が使われ、川の流れの如く、ごく自然に暮しの中に定着していた。田辺町内の飯岡の渡し場跡もその一つである。

飯岡の渡しは、とりわけて河内から南山城の普賢寺谷を経て、近江や伊賀・伊勢へ向う商人や旅人にとって親しみ易い短絡路上の渡し場であった。江戸時代の新井白石も飯岡に足跡を残していて、木津川に突き出た平坦な岩盤によって岩崎と呼ばれる地点が、彼のゆかりの地とされている。「飯岡の渡し場跡」の碑は、その脇の堤防上の草むらの中に建てられている。飯岡丘陵の木津川寄りの裾の部分に相当する。飯岡は、

このあたりにみる唯一の独立丘陵であることから、見通しの良い立地条件にめぐまれ、渡し場の目安としても絶好である。丘陵上からの眺望の良さは、南山城でも抜群であって、このことは視覚的な発信地としても有利な条件を持っていることを示している。丘陵上から発見されている弥生時代の集落の性格についても、狼煙台や見張り台とする考えを補強している。

飯岡は、古墳群の所在地としても古くから知られていて、明治初年の発掘によって銅鏡三面の他、勾玉、管玉、刀剣、馬具などの出土を見たトツカ古墳を含めて、車塚、ゴロゴロ山古墳、薬師山古墳、彌陀山古墳など墳形をよくとどめている。古墳群の周囲には、遺跡頭彰で著名な三宅安兵衛翁による石碑が建てられているが、渡し場跡の周辺でも江戸時代の紀年銘を持つ石塔や石灯籠などの石造物などに加えて、水路開掘や開拓に寄与した先人を顕彰する石碑などに注目してよいものが含まれている。つまり、「用水発起豊田碑」や「飯岡開拓小山伊織碑」も無視出来ない石碑であるが、ここ



木津川堤防上の石碑

では祈りや信仰に関係する資料である回國供養塔と、昨岡神社への寄進石造物の中から、近世庶民の願いの一部を垣間見ることの出来る紀年銘資料についてのふみ触れて置こう。

まず、木津川の河川敷の中で、渡し場にもっとも近い位置にあるのが、安山岩質の自然礫を素材とした回國供養塔である。高

さ1.2m程の塔で、表面の中央上部に梵字の大日如来を刻み、その直下に回國供養塔、向って右に天下和順、左に日月清明と刻字されている。右側の側面には、文政十一年十二月行者圓鏡造立之と刻まれている。供養塔の正面は、木津川の流れに向い、渡し舟の乗船・下船で往き交う人達の目につき易いように建立されている。さしづめ、行路平安、万事如意を祈念する行者の供養塔であるが、今ではただ一基がひっそりと川の流れを耳にして佇むだけに、静かに一人で手を合せるのに似合う石塔である。

渡し場の近くの石塔から堤防に登ると、目の前にあるのが豊田碑、伊織碑である。碑を右に見て集落に入ると、すぐに式内社の昨岡神社の前に出る。木津川に向う鳥居の前方にある円墳がトツカ古墳である。墳

丘は櫟の大木や竹林で覆われていて、昼なお暗い。櫟の太い幹には、古びて錆ついた折れ釘が、数本ずつのまとまりをもつて、数ヶ所に打ち込まれている。丑の刻参りの痕跡であろうか。倒れかかった小さな竹作りの鳥居形の樹物など、異様な雰囲気をか

もし出している。ここの「神魂丘旧蹟」の碑も、三宅安兵衛翁の遺志によつて昭和四年に建てられたものである。

昨岡神社境内にある石造物の紀年銘を見ると、石灯籠や手洗鉢など元禄から享保にかけての年号が確認される。これらの多くは、鎮守の杜の天神宮に奉獻された石造物であつて、天神信仰が今でも受け継がれている飯岡の里にふさわしい歴史的な遺品群といえる。石造物の多くに刻まれている城州綴喜郡飯岡村の河瀬又三郎、河瀬文兵衛、同信安らが木津川を渡つた川舟は、すでに時の流れの中に姿を消した。残っているのは、渡し場跡の石碑のみである。

ちなみに、田辺町内の渡しは、山本、富野、薪の渡しなどがあり、村人達に親しまれていた。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)